

フォーラム趣旨説明

イギリス経済学における方法論の展開

只腰親和 (横浜市大)

佐々木憲介 (北海道大)

このフォーラムは、イギリスにおける経済学方法論の展開を、19世紀から20世紀前半までの期間を対象として考察しようとするものである。

19世紀初頭のイギリスでは、経済学が独立した学科としての形を整えつつあった。そのような事態を受けて、経済学の方法論的・哲学的基礎についての考察が始まった。シュンペーターが述べるように、「経済学者たちが自分自身を解釈し始めたこと」が、この時期を特徴づける特色の一つとなったのである。方法論的考察の嚆矢となったのは、ウェイトリ、シーニア、J.S.ミルなどであったが、彼らはみな、「演繹法」を経済学の方法として主張した。その後、19世紀のほとんどの期間を通じて、演繹法が経済学方法論の正統的な方法とみなされるようになる。

演繹法に対抗する方法として、多くの論者によって主張されたのが「帰納法」であった。しかし、ミルの演繹法が帰納法を基礎としていたことにも示されるように、演繹法と帰納法との関係は、単純ではなかった。また、両方法とも多義的に解釈されたということが、問題をいっそう複雑にした。演繹法に対抗する帰納法は、ときとして、「特殊から一般への推論」、「結果から原因への推論」、あるいは「観察されたものから気づかれていないものへの推論」等々を意味するものであった。このフォーラムでは、19世紀から20世紀にかけて、イギリスにおける経済学方法論の重要なテーマであった、演繹法・帰納法をめぐる諸問題を中心に、検討を進めることを意図している。

第一報告では、経済学方法論形成期に焦点を合わせて、経済学における演繹法の内容を明らかにし、なぜそれが支配的な方法となったのかを論ずる。第二報告では、演繹法に対する批判勢力として登場した歴史学派を取り上げ、彼らが演繹法の何を批判したのか、それに対置した帰納法とはいかなるものであったのかを述べる。第三報告では、19世紀前半から統計学が社会研究の方法として注目を集めるようになることをふまえ、この時期に帰納法と統計的推測との関係がどのように捉えられていたのかを検討する。第四報告では、J.M.ケインズに即して、統計的推測の理論を帰納的推論の論理的妥当性という問題と関連させて論ずるとともに、その経済学的意義について考察する。

このフォーラムで取り上げるテーマは、経済学方法論史に登場する多数の問題の一つにすぎない。しかしわれわれは、このフォーラムを通じて、経済学史研究における方法論の意義という、より一般的な問題を考える手がかりを得たいと考えている。継続的な議論の出発点になることを願って、フォーラムに臨むことにしたい。